

今村夏子「こちらあみ子」論

——〈語り〉から見た〈わたし〉のあり方——

梶 祥子

はじめに

今村夏子は、二〇一〇年「あたらしい娘」で第二六回太宰治賞を受賞し文壇デビューを果たした。二〇一一年には同作を改題した「こちらあみ子」と新作中編「ピクニック」を収めた自身初の単行本『こちらあみ子』（筑摩書房）を刊行。同書で、第二四回三島由紀夫賞を受賞。二〇一六年に発表した「あひる」、二〇一七年に発表した「星の子」で芥川賞候補となり、二〇一九年『むらさきのスカート』の女（朝日新聞出版）で、遂に第一六一回芥川賞を受賞した。今村夏子は今最も注目すべき作家の一人であると言っても過言ではない。

本論文では、「こちらあみ子」^{注1}を対象に今村の語りの特性をあぶり出すと共に、彼女が描こうとしている〈わたし〉とはどのようなものなのか、考察を深めてゆきたい。

ここで本論に先立って、このテキストを扱う理由とその意義について述べておきたい。

本テキストには、この世に身の置き所がなく漠然とした寄る辺なさを抱えて生きる若い女性が描かれている。こうした人物像は、先に挙げた「あひる」「星の子」「むらさきのスカート」にも共通している。彼女らは、いじめられたり周囲の環境にうまく馴染めなかつたりしてどこか社会から浮いた存在として描かれる。しかし、本人には必ずしも自身が社会から浮いているという自覚がある訳ではなく、むしろ知らぬうちに社会という枠から飛び出たままになっている。周囲の人物達は、彼女達を社会に適応できない人と捉え、否定したり逃げようとしたりする。しかし、〈語り手〉は彼女らを異常や普通といった枠から解放とうとしてしている。それによって、読者もまた自身の中に彼女らと通じる場所があることに気が始める。ここに今村テキストの新鮮さと面白さがある

ると言える。

また、主人公に寄り添いながらも主人公の感情に入り込みすぎず、冷静に〈物語〉を語ろうとする〈語り〉のありようも指摘できる。今村の他のテクストではそれぞれ主人公を語る〈語り手〉の設定や位相は異なる。ある時は主人公の内側に入って、またある時は外から客観的に眺め、さらには主人公のすべてではなくごく一部の情報だけを提示したりする。このように異なった位相にあると思われる〈語り手〉連だが、主人公を〈わたし〉という一つにまとめた人物として物語化^{注2}しない（人物像を完結した形で語りきらない）という点では共通している。どのような内面を持つのかそのすべてを明かすことなく、ただその生きるありようをそのまま読者に向かって提示するのである。つまり〈語り手〉は主人公たちを定義づけしないと書いてよい。ここに一つの〈物語〉に帰結されない〈わたし〉という主人公たちが立ち現れ、同時に〈物語化〉せぬまま語り続けるという新たな〈語り〉のあり方が実現されるのである。

そこで本論文では、過去の出来事を語りまとめない〈語り手〉のあり方に着目しながら、今村テクストにおける主人公のありようと〈語り〉の特性との関係について考察する。なお、「こちららみ子」においては三人称の〈語り〉が取られているのだが、人称

と〈語り〉の距離との関係、あるいはそうした距離が生み出すものについても言及したい。論述においては物語論を援用する。

本論に先立って、〈語り〉と〈物語〉について定義しておきたい。

ある人物がある時、何らかの状況で、何らかの出来事を経験する。その経験が何らかの形で語られる。人は出来事を語ることで、その人物におきた出来事を言葉によって再現しようとする。この「出来事を言葉によって再現しようとする」行為を、本論では〈語り〉と定義する。言い換えれば〈語り〉とは、経験されたある出来事を伝える為のさまざまな工夫でもある。その〈語り〉を行う役割を担う存在が〈語り手〉である。

次に、「語る」という行為の意味について考えたい。そもそも、〈語り〉とはどのような目的に基づいた行為なのだろうか。それは言葉によって対象から「離れる」ことを意味すると論者は、考える。対象と距離を置く、すなわち「離れる」過程を経て、初めて人は他者にも通用する形で何かを伝えることができるようになる。語るという行為は、過去という倉庫のような場所に使われていた「記憶」をそのまま現在に引つ張り出す作業とは根本的に異なる。「記憶」にしまわれていた極めて個人的な出来事を、離れ

た所から見つめ直し、相手と共有可能な言葉によって表現することこそ、〈語り〉の中心的な働きなのである。言葉という形を与えられた時、あいまいだった記憶は、一つの〈物語〉として姿を現わす。

出来事を再編集し〈物語〉として語り直す行為を〈物語化〉と呼ぶ。〈物語化〉はいわば、点と点に過ぎない数ある出来事を、一本の線でつなぎ、出来事同士の結びつきを作ることである。それは限りなく無数に存在する出来事の中から自分にとって必要と思われるものだけを選び、そこから一つのまとまりのある全体すなわち〈物語〉を作る行為である。それゆえ出来事と〈語り〉と〈物語〉は密接した関係にあると言える。

一 何も知らないあみ子

本テキストの主人公は、周囲から「変わり者」として扱われている少女、あみ子である。

テキスト全体を通して、あみ子は社会や家庭において当たり前とされるルールを守れない人物として描かれる。例えば宿題をすること、風呂に毎日入ること等だ。以下は、あみ子が母に学校での素行を注意される場面である。

「いけません。ちゃんと宿題して毎日学校に行ってお友達と仲良くして先生の言うことをしっかりと聞いてお行儀よくできるならいいですよ。できますか？ 授業中に歌をうたったり机に落書きしたりしませんか？」

母はことあるごとに、ルールを破るあみ子を叱る。母はルールに反した行動を「いけません」と叱るばかりで、なぜルールを守らなければいけないのか、その理由を説明はしない。

あみ子の自由奔放すぎるふるまいは次第に同級生の中でも目立つものとなり、いじめられるようになる。しかし、彼女はいじめを気にもせず自由奔放に生き続ける。なぜなら、いじめられていることに気づかないからである。周囲の人達が「一体なにが気に入らなかつた」のかよくわからないまま、「なぜか」いじめられ続ける。ルールを守って生きるという前提もあみ子は知らないのがある。ルール自体も知らなければ、ルールを守らなければ社会から排除されるということさえ知らない。

まだ話の途中だというのに、男の子は突然あみ子の机の上に置かれた一枚のプリントを片手で取り上げた。「この漢字。私という漢字に送り仮名はいらん。しをつけたら、読むときわ

たししになるじやる。朝つていう字も左側が車になつとる。
こわい。字も汚い」

引用部は、あみ子が「私」という字を漢字で書けないことを同級生に指摘される場面である。あみ子は漢字を読めないだけでなく書くこともできない。また自分自身が漢字を書いていないという事実も他人から指摘されて初めて気が付く。つまりあみ子は、「私」という漢字が書けないことに象徴されるように、自分自身についてもよく知らないのである。

あみ子は、社会において誰もが知っていることを知らない人物として描かれ続ける。常識やルールや漢字を知らないが故に、自身が置かれている立場や他人が置かれている立場についてもまた理解できないままである。だが逆に言えばあみ子は常識やルールを「知らない」代わりに、自身の思うところのみを信じることができる。他人にどれだけ変人扱いされてもあみ子は自身の行動を変えようとしない。その意味では自身のありようを貫き続けており、社会に組み敷かれぬ強さを持っているとも言える。

二 語らないあみ子

本テキストは、三人称現在形の〈語り手〉が過去のあみ子を語

るという回想形式を取っている。〈語り手〉はあみ子に焦点化^{注4}し、まるで自分のことのように流暢に語るが、かと言ってあみ子自身が自分のことについて明晰に語ることはない。これは本テキストの〈語り〉の重要な特徴である。

このことについてあみ子に焦点化した〈語り手〉は、次のように述べている。

そのとき、うまく話してやるができなかった。話してやりたいのはやまやまなのだが、なにぶん祖母と一緒に暮らす前、ここからずっと遠くの家に住んでいたころの話だから、もうほとんど忘れてしまった。

あみ子は、「話してやりたい」と思える出来事を持っている。しかし、その出来事を忘れてしまうため、自ら過去の出来事と向かいあうことも言語化することもできない。

例えば片思いの相手だったのり君に殴られ歯が欠けてしまったというエピソードがある。それをあみ子は「うまく」自分の言葉で語ることができない。つまり、自分の出来事を一つのストーリーとして筋道立てて語るといふ〈物語化〉の能力を持たないと言え

また〈語り手〉は、家族に対するあみ子自身の思いについて、以下のように語る。

当時には兄にも笑顔があつたのだ。(中略) 兄が不良になつたのは突然のことだつた。不良以前と不良以後があるだけで、あみ子はその中間を思い出せない。兄だけでなく、同じ時期に母も変わった。兄が突然不良になつたように、母は突然やる気をなくした。(中略) は論者に抛る。以下同様)

流産をし体調を崩した母や不良になつた兄について、あみ子は「突然」の出来事であつたと述べるだけだ。あみ子は、中学校を卒業して時間が経ち母や兄と絶縁状態になつた引用部においても、筋道となるはずの「不良以前」と「不良以後」の中間を思い出すことができない。あみ子にとって、母や兄の変化は未だに「突然」で受け入れ難い出来事であり続け、切り離された一つの点にしかならない。そのことを一本の線で〈物語〉としてまとめることはできないのだ。

語れないあみ子とは対照的に、本テキストを語る〈語り手〉は、兄や母の変化について因果関係を明らかにしながら時系列に沿つて流暢に語る。兄や母の変化はあみ子以外の者にとつては「突然」

の出来事ではなく、因果の脈略を持つているのだが、それをただ一人あみ子だけが知らない。つまり、本テキストは、何も知らず語れない主人公・あみ子に代わつて、〈語り手〉があみ子の〈物語〉を語るという構造をもつていると言える。以下、本テキストのこうした構造に着目しながら詳察していく。

三 あみ子に寄り添う〈語り手〉

三人称小説とは、「〈物語〉世界に登場しない非作中人物が、第三者的に〈物語〉を語る」小説である。

本テキストでも、非作中人物が〈語り手〉として設定されている。その証拠に、〈語り手〉があみ子の言動に直接影響を与えることはない。〈語り手〉は、あくまで〈物語〉世界の外から距離を置いて彼らについての〈物語〉を語る。よつて本テキストは、三人称小説であるとまずは捉えてよいだろう。三人称小説の持つ〈語り〉の特徴が本テキストにおいていかに発揮されているのか、まず第一節で述べたあみ子の性質を〈語り手〉がいかに語るかという点に着目しながら考察を進めたい。

前述の通り、あみ子は自分の語るべき〈物語〉を「知らない」人物である。すなわちあみ子は、従来の〈物語〉論の意味では〈物語化〉の能力を持たない人物と言えよう。〈語り手〉は、テ

クスト内のどの作中人物とも一体化せずテキストを〈物語〉の外から語ろうとするのだが、唯一「接近する作中人物こそ、〈物語〉を持たないあみ子である。以下にあみ子に接近する〈語り〉を引用しながら、考察を続ける。

「ただいまかえりました」

走りゆく自転車に向かってそう挨拶したのはのり君だった。

(中略) 自転車に向かってそう挨拶したのり君を見て、たのもししい気持ちになったあみ子は、大きくエヘンと咳払いをひとつしてから、手提げ鞆の中から茶色い箱を取り出した。

引用部において〈語り手〉は、あみ子ののり君に対する「たのもししい」という心情を、彼女の内部(思考・諸感覚・心情等)に焦点化して語る。しかし、「あみ子は」とあるように、主語は一人称ではない。つまり〈語り手〉はあみ子の気持ちに寄り添いつつ、三人称を用いて距離を取りながら語っているのである。

一方〈語り手〉はあみ子以外の作中人物についてあまり詳しくは語らない。

母はあみ子に背を向けたままその場にしゃがみこみ、声をあ

げて泣き出した。(中略)

「どうしたん。お母さんどうしたん。あみ子」

「わからん。いきなり泣きだした」

「なんで、あつ。なにこれ」(中略)

「弟、死んだったけえね。おはかいるじやろ。お母さんのお祝いも」

「お母さんはこれもらつてうれしいかの」

「うれしくないかね」(中略)

「でもあれつてほんまにいきなりなんよ。あみ子なんにもしてないよ」

引用部は、流産した母のためにあみ子が胎児の墓を作るという場面である。母は流産のショックを乗り越えられていない時にこの墓を見たことで「声をあげて泣き出す。その因果関係を兄は理解できているが、あみ子は理解できない。あみ子にとって母は「いきなり」訳もなく泣き出す存在なのである。この場面において〈語り手〉は、あみ子の「いきなり」というふいうち感を語るだけで、母がどう流産を捉えたのか、なぜあみ子以外の作中人物があみ子の墓に嫌悪感を示したのか等について、具体的なことはい切語らない。あみ子の捉え方を尊重するかのように、〈語り手〉は

母の流産を「いきなり」の一言で片づけてしまふ。

〈語り手〉が近づき、時に焦点化する人物はあみ子に限られており、すべての作中人物に接近する訳ではない。本テキストにおける〈語り手〉は、従来の三人称小説において数多く設定されてきた「全知の神」^神とは大きく異なるのである。〈語り手〉はあみ子についてはよく知っているが、あみ子以外の作中人物についてはほとんど知らない。そのような特徴を持った〈語り手〉なのである。

四 〈補足的語り〉

前述の通り主人公あみ子は、自身の〈物語〉を「忘れてしま」う。それをどうにかこうにか時系列に沿って語るのが、本テキストにおける〈語り手〉の大きな働きである。テキストの随所で〈語り手〉は、〈物語〉を「知らない」あみ子に代わって当時のあみ子が知り得なかった情報まで加えて詳細に語っていく。このような〈語り〉のありようを〈補足的語り〉と定義付けたい。

~~~~~  
できることなら毎日でものり君と一緒に帰りたいのだが、  
登下校は兄と二人と決まっていたからそうもいかなかった。

〔中略〕「妹が学校の行き帰りに悪さをしないよう見張ること」

が、兄が両親から言いつけられていた使命だった。あみ子にとって兄との登下校は楽しいものだったが、兄のほうはそうでもなかったかもしれない。  
（傍線・波線は論者に拠る）

引用部は、あみ子の登下校の習慣について〈語り手〉が語る場面である。あみ子は片思いの相手であるのり君と初めて登下校を共にし、その喜びから「毎日でも一緒に帰りたい」と思うようになる。しかし、兄と二人で帰らなければならないという母が決めた規則に縛られ、あみ子の願いはなかなか叶わない。そしてあみ子自身は自分が「行き帰りに悪さをしない」ために、兄との登下校を強いられているという事実さえ知らない。だからこそ、純粋に兄との登下校を「楽し」めているとも言える。〈語り手〉はあみ子の知りえない情報を提示し、兄の心情を「兄のほうはそうでもなかったかもしれない」と推測する。ここでも〈語り手〉は、あみ子に寄り添いあみ子の心情「く部分」を語りながら、あみ子の知らない事実「一部分」について補足するかのようには語るのである。しかし〈語り手〉も兄の気持ちについて確信的に語るわけではなく、「かもしれない」という推測に留める。このように〈語り手〉は、あみ子以外の作中人物については曖昧な語りしか行えないという特性を持っていることが指摘できる。

〈語り手〉は、基本的にあみ子に寄り添って彼女の視点から〈物語〉を語ろうとしている。しかしここで注意すべきことは、〈語り手〉が時にあみ子に寄り添ったり、また別の時にはあみ子以外の作中人物の心情を推測したりと、自由に作中人物との距離を変化させている点である。すなわち〈語り手〉は、あみ子に焦点化して〈物語〉をまとめあげようとはしていないのである。

## 五 〈語り手〉の特性

本テキストにおける〈語り手〉は、前述の通り全能性を有さないまま、あみ子に代わってその〈物語〉を紡ぎあげてゆく役割を担っている。

ここで、あみ子と〈語り手〉の差異について考えてみたい。〈語り手〉はあみ子の〈物語〉を基本的に「くた」と過去形で語ることから、あみ子の〈物語〉を現在から振り返って語っているということが分かる。つまり、語られる対象であるあみ子と、語る主体である〈語り手〉との間には、時制の差があるのである。

以下の引用部は、テキスト最終部における「祖母の家にいる」あみ子の様子である。

「あみちゃん、あみちゃん」 すみれの入った袋を落とした。

あみ子はまだびっくりしている。でも呼ばれたのだから、はいとこたえて祖母の声がする家の中へと向かう。途中、気になって振り返り、すぐに前を向いて歩きだす。だいじょうぶ。あの子は自分こへは辿り着きそうもない。

すみれの花を持って、あみ子は近所に住む仲良しの友達さきちゃんを待つ。竹馬に乗ったさきちゃんの歩みは遅く、なかなかあみ子の元へ辿り着きそうにない。あみ子は、突然呼ばれたことに驚きながらも声の元に行こうとする。この時あみ子にまつわる〈語り〉は、「向かう」「歩きだす」と現在形に変わっている。

ここで〈語り〉の時制に再度着目したい。

〈語り手〉は、この後実際にあみ子がさきちゃんと会えたのか会えなかったのか、どちらの結末も語らずに「あの子は自分こへは辿り着きそうもない」と語りを終えてしまう。あみ子は、竹馬に乗ってその場で足踏みをして「辿り着きそうもない」さきちゃんを待たずに、まだ見ぬ未来へ向かって一人「歩きだす」。つまり、この場面においてあみ子だけが、〈語り手〉も読者も知らない未来に向かって動き出しているのである。

この場面において、〈語り手〉はあみ子を過去形では語らない。つまりここで初めて、〈語り手〉とあみ子の間に確かに存在して



いた時制の差が無くなくなっていることが指摘できる。過去形を用いなければ語れなかった存在であったあみ子を現在形で語る時、〈語り手〉とあみ子の時制は一致する。この、テキスト最終部において、〈語り手〉もあみ子もあみ子の未来を知らない。言い換えれば、あみ子が「歩きた」した未来とは、まだ誰にも語り得ることのできない、それゆえ無限の可能性に開かれたものでもあるのだ。語り尽くさない、語ることでまとめあげない。そのことが、逆に〈わたし〉に新たな可能性をうみ出しているのである。

## 六 〈物語〉を持たないということ

一において、あみ子は「知らない」という特性を持つ人物であることを指摘した。あみ子は、社会的に常識とされるルールを知らず、ルールを守り社会適応しようとする母をはじめとした他者の気持ちも理解できない。社会適応のために努力しなければ「変わり者」として社会から排除されるということもまた、あみ子は知らない。

しかしあみ子は本当に何もかも知らず、社会から排除されてしまう自分自身についてすら知らないと言いつつよいのだろうか。いじめられたという事実やいじめによって傷ついた自身についても、全く知らないのだろうか。

「あのねえ、妹だったんと。弟じゃなかったんと。なんで誰も教えてくれなかったんじやろう。いつつあみ子にひみつにするね。絶対みんなひみつにするよね」

引用部は、あみ子がトランシーバーに向かって、「もしもし聞こえとる？」と話しかけた後、自身の近況を話す場面である。あみ子の持つトランシーバーには対となるトランシーバーが存在した。しかし今、それはどこに行き、誰が持っているのか。対となるトランシーバーの相手の不在さえ分からないまま、あみ子は一方的に話しかける。両親が離婚すること、引越すこと、のり君と離れ離れになってしまうこと、のり君が泣かせたこと、その四点を矢継ぎ早に話したあみ子は、そこで突然全く違うことを話し始める。それがここに引用した、流産で亡くなってしまった赤ちゃんは「妹」だったというエピソードである。

あみ子は流産で妹を亡くした時から中学校まで、赤ちゃんを「弟」であると思っていた。それが勘違いだったということを、引用部直前の場面で知る。「人間じゃ。女の子の、赤ちゃんじゃ」と教えてくれた父の言葉を受けて、あみ子は「なんで誰も教えてくれなかったんじやろう。いつつあみ子にひみつにするね。絶対みんなひみつにするよね」と言葉にする。この場面において、あ

み子はただの何も知らないあみ子ではない。どうせ理解できないはずだからと、あみ子に事実が知らされないという状況を知っている。同時に、自身が多くの事実を知らないことについても自覚的である。あみ子は、自分に事実を教えようとしない他人のことも、何も知らない自身のこと、どちらも既に知っていたと言える。

以下の引用部は、トランシーバーに思いを吐露し終わったあみ子の様子である。

トランシーバーが熱かった。手が汗ばんでいた。六畳間の空間がクラスメイトたちの笑い声で満たされた。どういふことかと思つたら、そのときあみ子は泣いていたのだ。あみ子が泣くとみんな笑った。泣きかたが変じやと言つて、指を差してげらげら笑った。でもそんなにおもしろいだろうか。自分ではわからない。

引用部において、あみ子は泣きながら自身がいじめられていた時のことを思い出す。当初いじめられていたことさえ知らないように見えていたあみ子は、実は自身が不本意に「笑われ」いじめられる存在であることを知っていたのである。さらにあみ子は

じめを知っていただけではなく、「自分ではわからない」とあるように、いじめられる理由が「わからない」自身についても十分かかっているのである。

「どこが気持ち悪かったかね」

「おまえの気持ち悪いところ？ 百億個くらいあるでー」

「うん。どこ」

「百億個？ いちから教えてほしいか？ それとも紙に書いて表作るか？」

「いちから教えてほしい。気持ち悪いんじゃないか。どこが」

引用部は、卒業を間近に控えたあみ子がクラスメイトの坊主頭と会話を交わす場面である。ここであみ子は、初めて自分自身の言葉で「どこが気持ち悪かったか」「教えてほしい」と人に頼んでいる。「教えてほしい」と頼むのは、自身が「なぜ」いじめられているか知りたいからである。つまり、いじめられていることについて何らかの自覚があると推測できるのだ。そのように推測していくと一つ前の引用部も違った色彩を帯びてくる。自身の声が相手に届いているのか分らないトランシーバーによるコミュニケーション体験、それはコミュニケーションとも言えない一方的な発

話ではあるが、ともかくもその体験を経て、あみ子は坊主頭という実在の相手に向かって自身の思いを自身の言葉で伝えているのである。

あみ子の発言を受けた坊主頭は、「あみ子から目をそらさ」ず「少しの沈黙のあと」、「そりゃ、おれだけのひみつじや」と答える。(この坊主頭の姿勢については後述する。) あみ子は、結局なぜ自分がいじめられていたのか、分からないまま「なにも言え」ずに立ち尽くす。あみ子は自分といじめの因果関係を知り得ないまま、つまりは〈物語化〉できないまま、その場に立ち尽くすのである。問いかけることができて、他人からその答えは返つてこない。トランシーバーのように見えない相手の答えを待ち続けるしかない。

次の引用は、坊主頭と会話した後、祖母の家に引越した現在のあみ子にまつわる〈語り〉である。

たくさんのひとたちの顔を忘れた。名前すら、もともと知らないひともある。「卒業してもわすれんよう」と、あのとき坊主頭はあみ子の肩を小突きながらそう言った。彼はあみ子の返事を聞かずに教室から出て行った。忘れない、と約束しなくてよかったと思う。実際すっかり忘れていたから。

坊主頭に話しかけてもなお、自身といじめを関連付けられなかったあみ子は「たくさんのひと」も「坊主頭」も「すっかり忘れてしま」う。あみ子は、結局自身にまつわる出来事をすべて忘れ、〈わたし〉というものを一つの〈物語〉として、筋道を立ててまとめることができない。あみ子の〈物語化〉は、本作を通して遂に叶わなかったのである。

しかし、〈物語〉を持たないというあり様を、簡単に〈物語化〉できない不完全な生き方として否定してよいのだろうか。

## 七 〈わたし〉を物語化しないということ

前述したように、あみ子は最終的に自身にまつわる出来事を「忘れ」る。〈わたし〉というものがもしもまとまった一つの〈物語〉であるとしたら、あみ子には〈わたし〉がない。

次の引用では、すべての〈物語〉を「忘れ」たあみ子が、さきちゃんにしてあげられることを語るところである。

「なんだつままない」とさきちゃんは言ったけれど、あみ子のむきだして見せる空洞をよほど気に入ったのか、更に顔を近づけてきた。こんなことならお安い御用だ。見たいぶんだけ、いくらでも見せてあげられる。

「恋する相手に殴られる気分」を聞いたがったさきちゃんに、あみ子は「話してやるのができなかった」。その対応に満足できなかったさきちゃんは「なんだつまらない」と不満を訴える。しかし、あみ子には「話してやる」以外にも、まださきちゃんに對してできることがあった。それは、殴られて欠けてしまった歯をさきちゃんに見せることである。あみ子は、自分に起こった出来事を〈物語〉として語ることはできなくとも、何かを見せるという行為によつてさきちゃんとながる（コミュニケーションを取る）ことができている。またさきちゃんのために花を摘んだり、自分の口を見せたりして、さきちゃんを「うひゃあ」と喜ばせることだつてできている。あみ子は、言葉で紡いだまとまった〈物語〉を持たなくとも、祖母の家という新天地で新たな人生を生き直しているのだ。そのように読み直す時、第六節における坊主頭がまつすぐ目を見てあみ子に答えることにも、身体的なコミュニケーションの可能性を見ることができるのである。

## おわりに

あみ子には、自分自身をうまく語れないという特性がある。このような〈わたし〉像は、〈わたし〉とは一つの〈物語〉として

語り得るとする、従来の〈わたし〉像に反するものであろう。しかし今村テキストにおいて、あみ子は〈物語〉に帰結されない自由な〈わたし〉を生き続ける。固有の〈物語〉を持たない〈わたし〉は何者でもないから、他人からも信頼を得られないかもしれない。それでも〈わたし〉として生きていく。そうした不定形の〈わたし〉のあり様を、今村は真摯に描き続けるのである。普通でも異常でもない、〈物語〉を持たないただの〈わたし〉を、そのまま提示する〈語り〉、ここに今村テキストの唯一無二の新しさがある。

起承転結によつて一つの〈物語〉としてまとめられた〈わたし〉像は、物語論の世界の中だけで求められている訳ではない。読者である私たちが生きる現実世界でも、そうした一貫性が当然のように求められる。社会において私達は合理的な行動を求められ、不合理な行動は理解されない。何者にもなれない私達は認められず、そして社会に参入することも阻まれるのだ。

しかし、〈わたし〉とは、本当に他者と共有できる〈物語〉を持った存在であるべきなのであるうか。何者にもなれないただの〈わたし〉は、葬り去られるべきなのであるうか。この問いに関して、今村は最新作「むらさきのスカートの女」<sup>注</sup>において、次のような〈わたし〉像を提示している。

うちの近所に「むらさきのスカートの女」と呼ばれている人がある。いつもむらさき色のスカートを穿いているのでそう呼ばれているのだ。

本テキストにおける主人公「わたし」は、登場人物の一人でありながら「むらさきのスカートの女」を観察する〈語り手〉の役割を一手に引き受ける存在である。主人公「わたし」は、テキスト終盤まで名前さえ明かされない。「わたし」は自分の名前や情報を示さない代わりに、「むらさきのスカートの女」という近所に住む女性のことを事細かに観察し語り続ける。すなわち語ることによつてのみ存在するのである。本テキストにおいて「わたし」は、語り得る〈わたし〉という主体さえ放棄し、ただ「むらさきのスカートの女」を近くで観察し語る〈語り手〉としての〈わたし〉性だけを維持しているのである。

本テキストにおいて、「わたし」はもはや語られるべき〈わたし〉を持つていない。「黄色いカーディガン」を着てさえいれば誰でもその呼称に収まることのできる、そうした代替可能な存在としてテキストの世界を生き続けるのだ。しかし、「黄色いカーディガンの女」は死ぬことなく、テキストの世界をとにかくも生き続ける。今村テキストでは、何者でもないただの〈わたし〉がなん

とか生きていくのである。他者に評価される〈物語〉を持つていなくとも、何者にもなれなくても、〈わたし〉は葬られずただ生きていく。論者はここにかろうじて文学というものの救いと励ましがあると考えている。

#### 注

注1 今村夏子「こちらあみ子」(『こちらあみ子』、筑摩書房、二〇一四年六月)

注2 語り手：〈語り〉の目的にとつて必要なものを選択し、ある出来事を語る場合に〈語り手〉自身の遠近法・感じ方に基づいて出来事を一つの〈物語〉に再構築させていく存在である。つまり〈語り手〉は、ストーリーテラーとして、語るべき出来事を取捨選択し、効果的に物語を伝えるという役割を担う存在である。

注3 物語化：あらゆる〈語り〉は、出来事について語ることであり、それは言葉にして語ることで初めて一つの〈物語〉として立ち現れる。〈物語〉とは、ある筋によつてまとめられる一つのストーリーのことでありそれは誰もが持ち得るものである。出来事を再編集し〈物語〉として語り直す行為を、〈物語化〉と呼ぶことができる。従来の〈物語〉論では、テキストの主人公「わたし」は「わたし」という一つの名のもとにまとめられる〈物語〉として存在するとみなされてきた。つまり「わたし」とは、「わたし」の人生に起きたすべての出来事を取捨選択し、一つの整合性をもった〈物語〉として再編集

することのできる存在だ、と考えられていたのである。

注4 焦点化：〈物語〉世界の情報を把握するために、ある特定の作中人物の視点を採用することである。焦点化には、大きく分けて①焦点化ゼロ・非焦点化（神の視点・全知の語り手）②内的焦点化（語り手と作中人物の知覚を共有する視点）③外的焦点化（人物の外面しか描かない視点）の三つの種類がある。

注5 「全知の神」：まず三人称小説とは、三人称の〈語り〉によって構成される小説のことである。このタイプの小説において〈語り手〉は物語世界には登場せず物語の外側にいる。そして、第三者として〈物語〉を語る。このような〈語り〉を、本論文では「三人称の語り」と呼び、その「三人称の語り」において、物語のあらゆることを知る特権や、全ての作中人物の思考に入り込む特権を持った語り手を、「全知の語り手（神）」と定義する。これに対して一人称小説では、〈語り手〉は物語の内側において、人物の一人に焦点化し「私」を主語にして物語を語る。このような〈語り〉を、「一人称の語り」と呼ぶ。

注7 今村夏子「むらさぎのスカートの女」（『むらさぎのスカートの女』、朝日新聞出版、二〇一九年六月）

使用テキストは、「こちらあみ子」『こちらあみ子』筑摩書房、二〇一四年六月

#### 参考文献

- ・前田彰一『物語の方法論―言葉と語りの意味論的考察』（多賀出版、一九九六年二月）
- ・松本和也『テキスト分析入門 小説を分析的に読むための実ガイド』（ひつじ書房、二〇一六年一〇月）
- ・菅原克也『小説のしくみ 近代文学の「語り」と物語分析』（東京大学出版会、二〇一七年四月）

（かじ） しょうこ 二〇一九年日文卒